

幼稚園や保育園、認定こども園などに通う年長児をもつ保護者、約2,000名が対象

園での経験と 幼児の成長に関する調査



卒園前の年長児をもつ保護者を対象に



この調査を通して明らかにしたのは、主に次の3点です。

1. 園生活を通して、親子はどのような成長を感じているのか？
2. 子どもの「学びに向かう力」と関連する、園での経験とは？
3. 保護者自身が成長を感じる、園との関わり方とは？

このレポートは、調査結果の中からとくに注目したいデータを抜粋してご紹介します。

目次

- 第1章：園生活を通じた親子の成長実感…………… 5
- 第2章：園での経験と子どもの育ち…………… 9
- 第3章：保護者自身の成長と園と関わる機会…………… 13
 - 調査結果をどのように読み取り、活用するか?…………… 18
 - 親子が「ともに育つ」園であるために(園現場での工夫)…………… 19

ベネッセ教育総合研究所



背 景

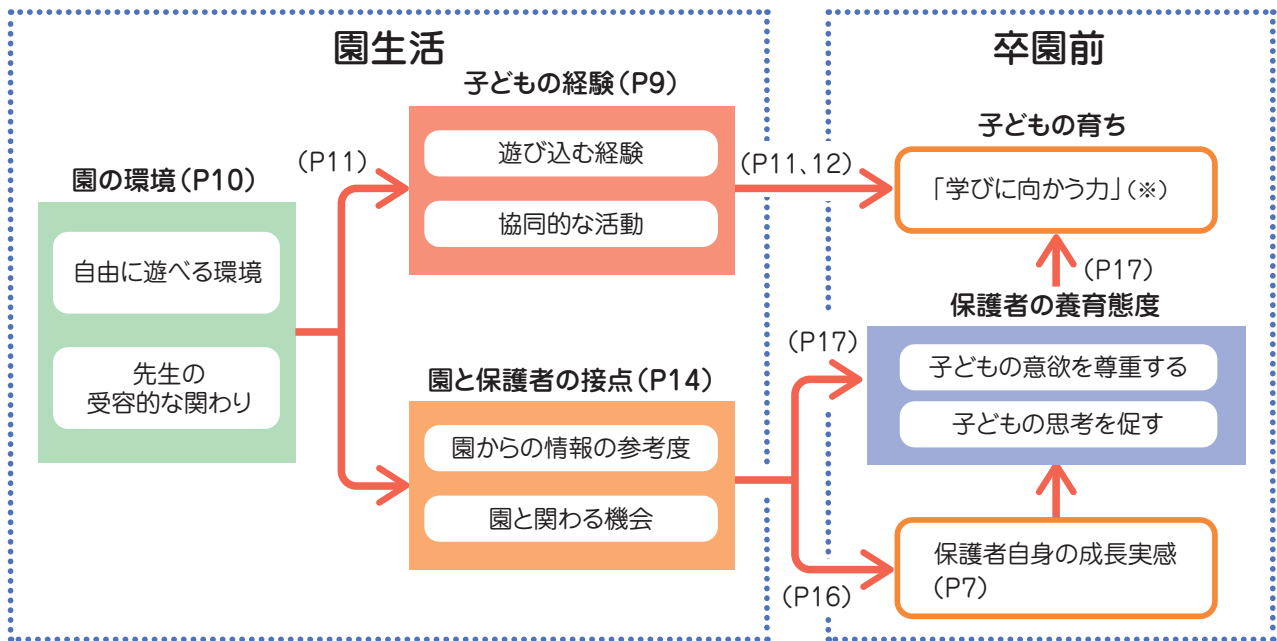
共働きの増加などの社会の変容を背景に、幼児が園（幼稚園、保育園、認定こども園など）で過ごす時間は増え、園の役割は拡大しています。その一方で、国内外の研究において、幼児期の育ちや教育の重要性が明らかになりつつあるにもかかわらず、園での経験と子どもの育ちとの関連を定量的に検証した研究は限定的であるといえます。

そこで本調査は、子どもの育ちと関連する、①園での子どもの経験 ②園の（人的、物的）環境、また新たな視点として、保護者自身の成長実感と関連する、③保護者と園との関わり方について明らかにすることを目的に設計しました。

保護者の主観に基づく回答であるという限界はありますが、園での経験や園の環境などが、どのように親子の成長と関連しているかを把握することが、これからの保育のあり方を考える際の一つの材料となれば幸いです。

<本調査で明らかになった主な関連>

*矢印は、本調査で明らかになった各要素の関連を示す（一部、本レポートで図示を省略しているものも含む）



※「学びに向かう力」について

本調査では、子どもの育ちとして「好奇心」「協調性」「自己統制」「自己主張」「がんばる力」を「学びに向かう力」と設定して、園生活との関連を調べた。「学びに向かう力」は生涯にわたり、社会生活を営むうえで基盤となる力である。また、「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」（ベネッセ教育総合研究所）において、小学校入学以降の学習や生活につながる幼児期の学びとして設定した3つの軸（「学びに向かう力」「文字・数・思考」「生活習慣」）のひとつである。

調査概要

- **調査テーマ**：園での子どもの経験や園の環境、園生活を通じた親子の成長実感などの意識や実態の把握
- **調査対象**：幼稚園・保育園・認定こども園などに通う年長児をもつ保護者2,266人（母親2,060人、父親206人） ※年齢は25～49歳
- **調査方法**：インターネット調査
（インターネット調査会社のモニターの中から、上記属性に該当する方に調査協力を依頼し、子どもの性別が1:1となるサンプル構成を目指して回収を行った）
- **調査期間**：2016年2月19日～2月22日
- **調査地域**：全国
- **調査項目**：園での子どもの経験、園の環境、園と関わる機会、園から提供される情報の参考度、園生活を通じた成長実感、子どもの「学びに向かう力」「文字・数・思考」、園の満足度など

〈本レポートを読む際の留意点〉

- ・本レポートで使用している百分比（%）は、小数点第2位以下を四捨五入して算出している。四捨五入の結果、数値の和が100.0にならない場合がある。
- ・特別な注記がない限り、本レポートでの分析に用いた数値は、母親2,060人、父親206人を母数として算出している。
- ・各図表内の（ ）はサンプル数を表す。

基本属性

●子どもの性別



※男児と女児が1：1となるように回収を行った。

●子どものきょうだい数



※この調査の対象となる「お子さまも含めて」たずねた。

●子どもの出生順位



●子どもが通う園の種別



●居住地

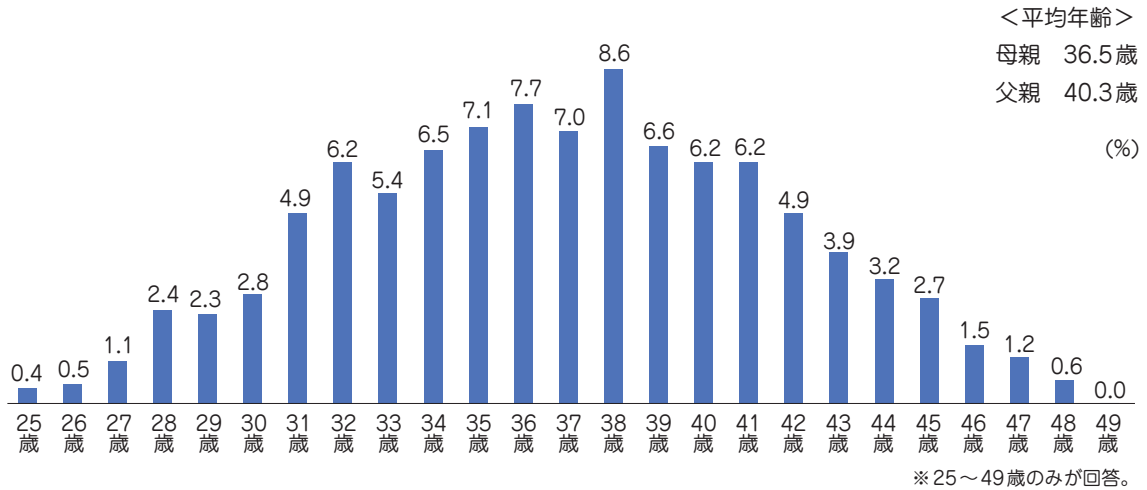


※居住地の都道府県を元に分類した。

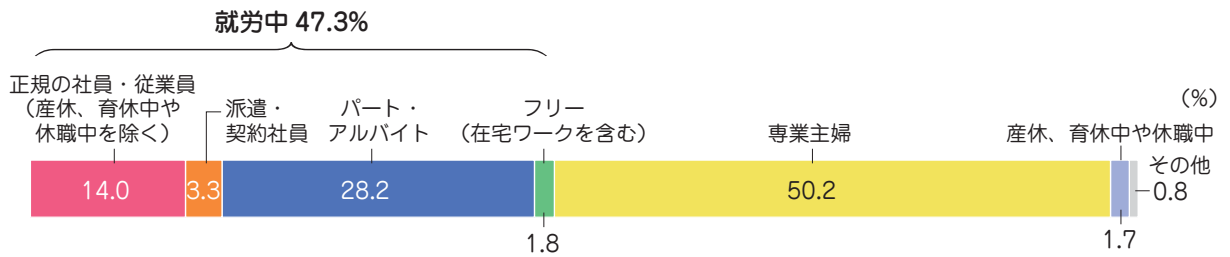


基本属性

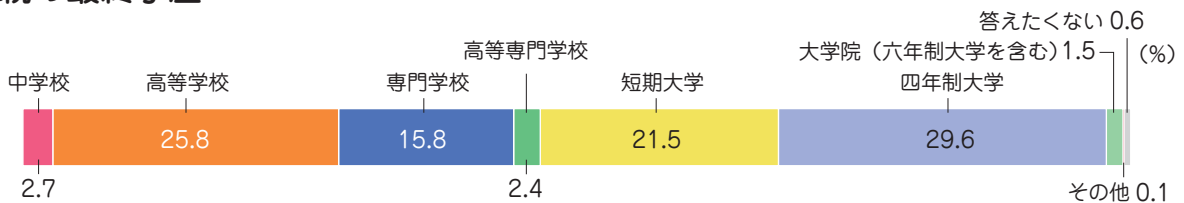
●回答者の年齢



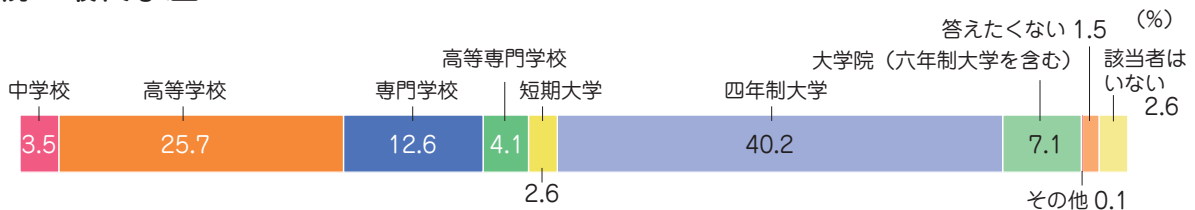
●母親の職業



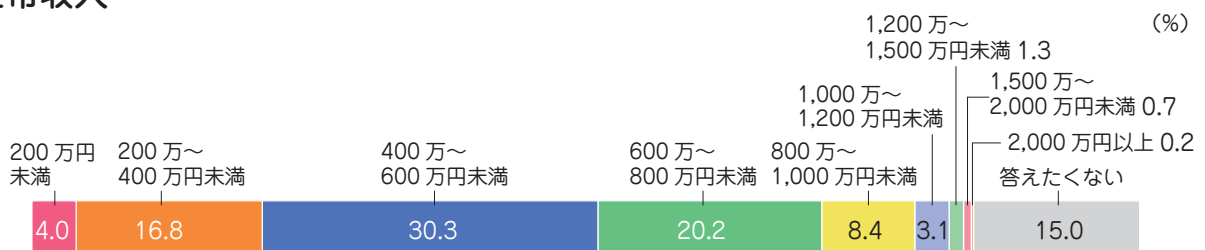
●母親の最終学歴



●父親の最終学歴



●世帯収入



①親子の成長実感と園の満足度

多くの保護者が園生活を通して、親子の成長を感じ、園に満足している

園生活を通じた親子の成長実感を10段階でたずねた。子どもの成長実感について「10段階中10」と答える比率は48.1%であり、平均は8.8であった（図1-1-1）。保護者の成長実感は10段階中6~8と答える比率がそれぞれ2割台であり、平均は7.0であった（図1-1-2）。また、小学校に入るうえで十分な力が身についたと思う比率（「とても身についた」+「やや身についた」）は94.0%と高かった（図1-1-3）。園の保育や取り組みへの満足度についてもたずねたところ、平均は8.9割と高く（図1-1-4）、多くの保護者が子どもの園生活におおむね満足して、園生活を通して親子の成長を感じていることがわかった。

Q 園生活を通してお子さまとあなたはどれくらい成長できたと思いますか。成長を実感する程度を10段階にした場合、あてはまるものをひとつお選びください。

図1-1-1 子どもの成長実感

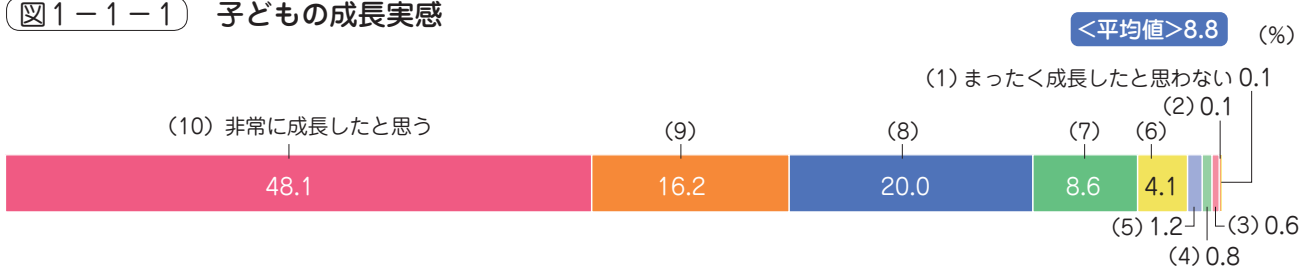
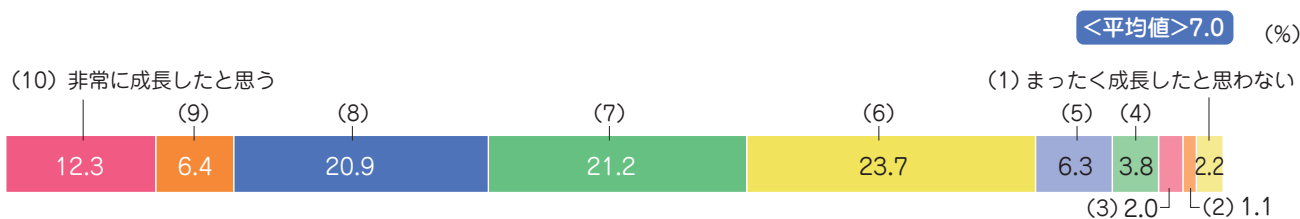
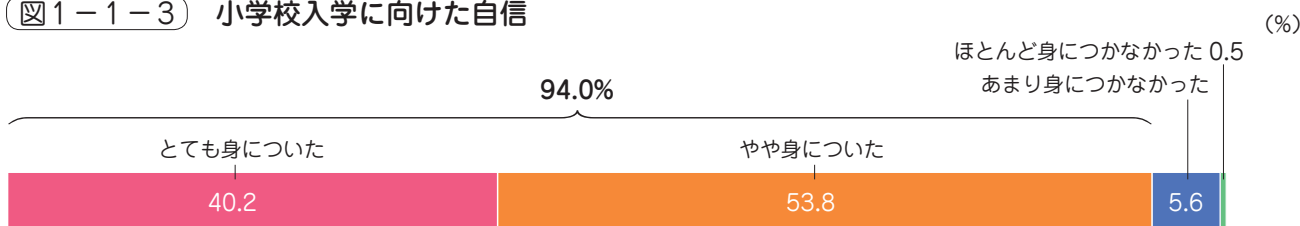


図1-1-2 あなた(保護者)の成長実感



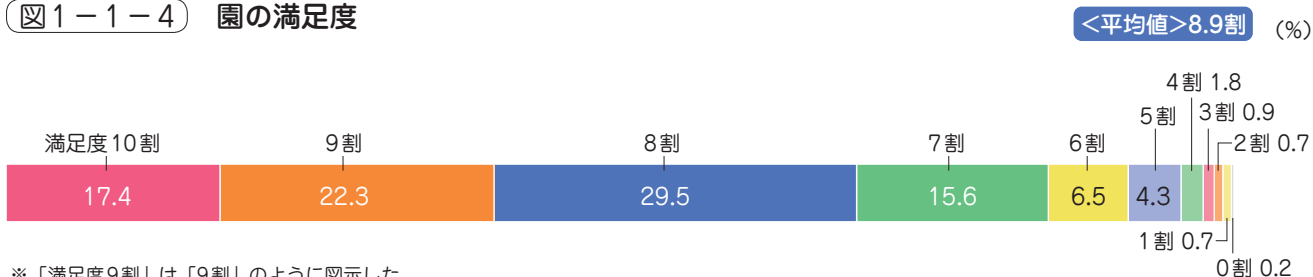
Q 園生活を通して、お子さまは小学校に入るうえで十分な力が身についたと思いますか。

図1-1-3 小学校入学に向けた自信



Q 総合的にみて、園の保育や取り組みに満足していますか。

図1-1-4 園の満足度

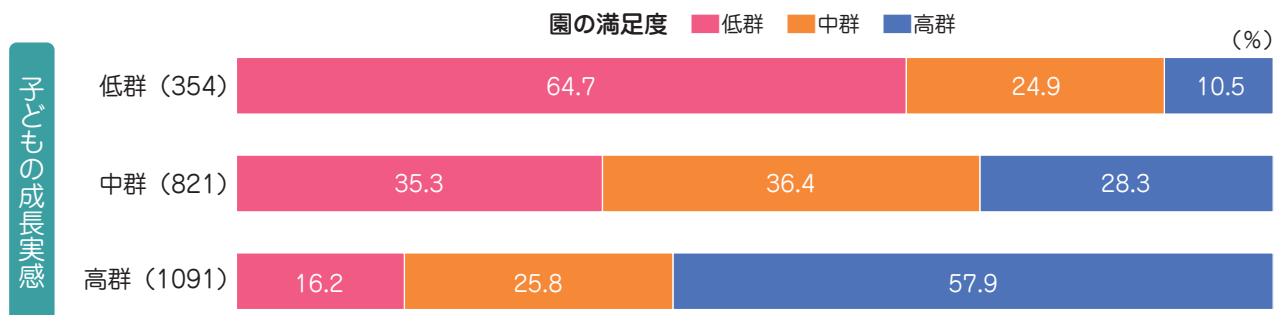


※「満足度9割」は「9割」のように図示した。

園生活を通して、子どもの成長実感が高い群は、園の満足度も高い

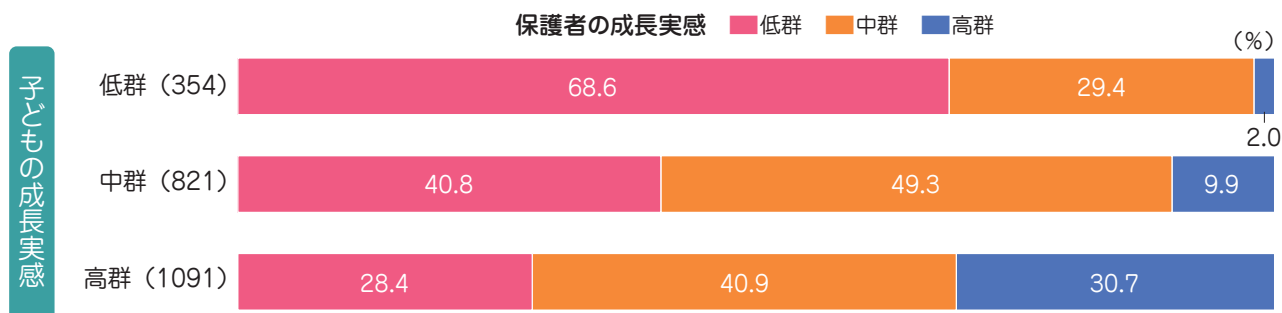
前頁で示した子どもの成長実感と園の満足度との関連をみた。子どもの成長実感が高い群では、園の満足度も高い傾向がみられた（図1-1-5）。また、園生活を通じた子どもと保護者の成長実感の強さは関連していることもわかった（図1-1-6）。子どもが成長する（と保護者が感じる）保育を実践している園では、保護者が成長することも重視していて、何らかの保護者向けの支援や取り組みをしている可能性が考えられる。

図1-1-5 園の満足度(子どもの成長実感別)



※園の満足度は、図1-1-4 (P5) の回答結果を元に、低群 (満足度7割以下)・中群 (同8割)・高群 (同9割以上) と設定した。
 ※子どもの成長実感、図1-1-1 (P5) の回答結果を元に、低群 (成長実感7以下)・中群 (同8、9)・高群 (同10) と設定した。

図1-1-6 保護者の成長実感(子どもの成長実感別)



※保護者の成長実感、図1-1-2 (P5) の回答結果を元に、低群 (成長実感6以下)・中群 (同7、8)・高群 (同9、10) と設定した。
 ※子どもの成長実感、図1-1-1 (P5) の回答結果を元に、低群 (成長実感7以下)・中群 (同8、9)・高群 (同10) と設定した。



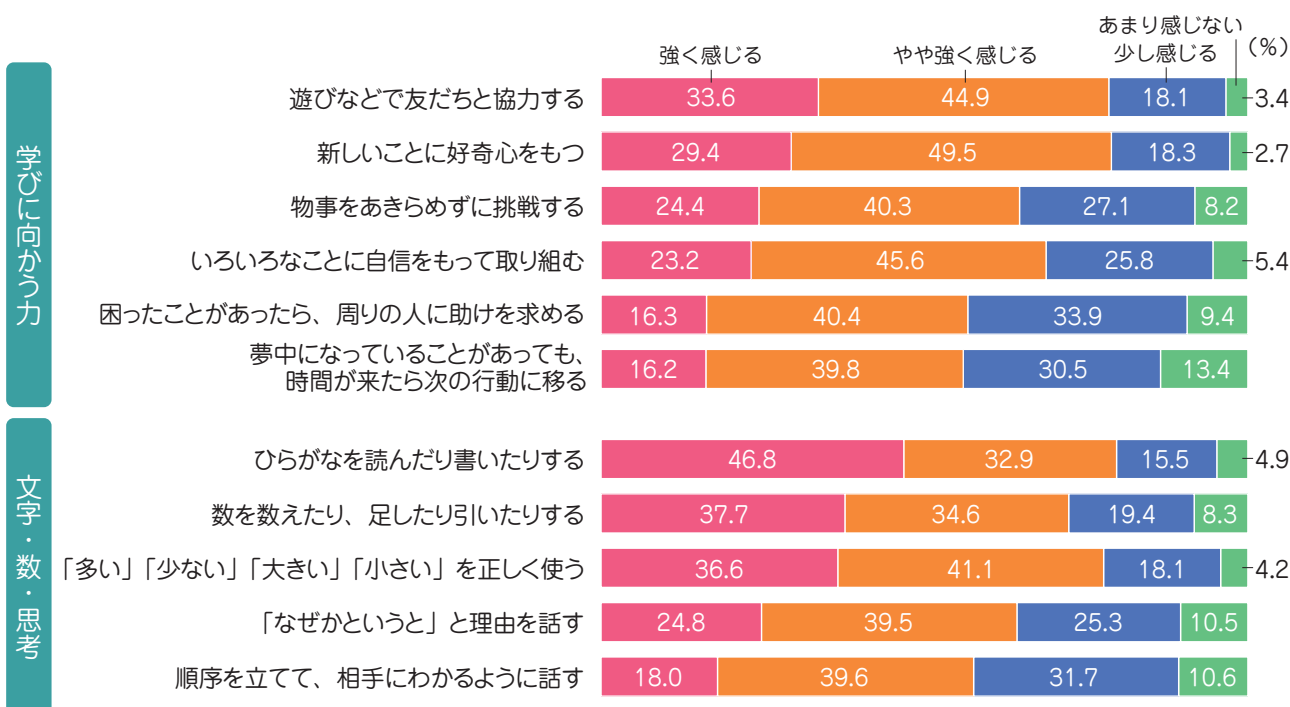
②親子はどのような成長を感じているのか？

子どもの成長は「友だちとの協力関係」、保護者自身の成長は「子どもの得意なことやよさへの気づき」などを通して感じている

園生活を通して子どもの成長を、保護者はさまざまな内容で捉えている。「遊びなどで友だちと協力する」ことができるようになったと感じる比率は78.5%（「強く感じる」+「やや強く感じる」。以下同）、「ひらがなを読んだり書いたりする」は79.7%など（図1-2-1）。保護者自身の成長については、「子どもの得意なことやよさに気づいた」比率が83.6%、「子どもへの関わり方がわかった」は67.5%であった（図1-2-2）。園生活を通して、親子ともにいろいろな場面で成長を感じていることがうかがえる。

Q 園生活を通して、お子さまは次のことができるようになったと感じますか。

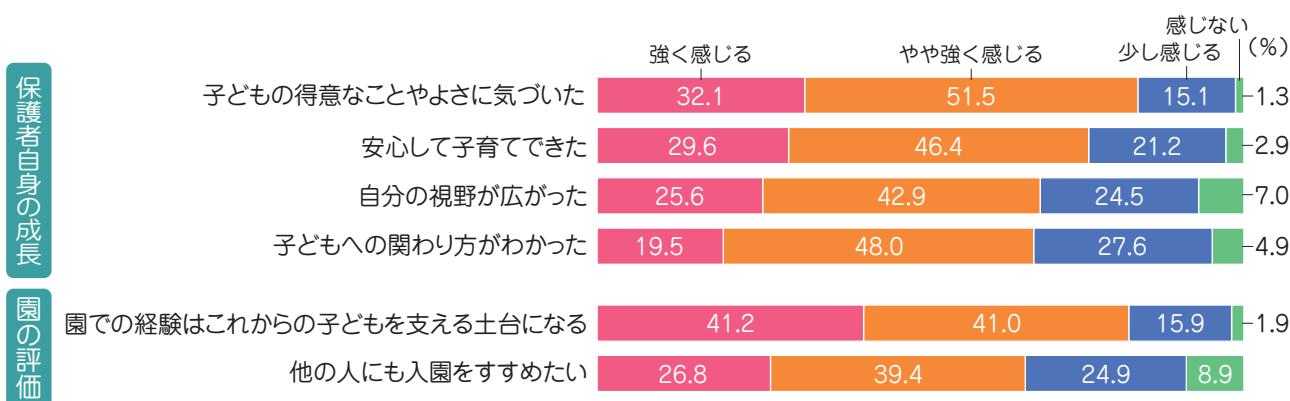
図1-2-1 子どもの成長実感の内容



※項目と分類（「学びに向かう力」「文字・数・思考」）は、「幼児期から小学1年生の家庭教育調査」（ベネッセ教育総合研究所）を参考している。

Q 園生活を通して、以下のことをどれくらい感じますか。

図1-2-2 保護者自身の成長と園の評価



●園生活を通してお子さまの成長を感じたエピソードを教えてください。

入園前は、自分にはできそうにないと判断すると挑戦すらしようとしなかったが、年長になってからはなわとびや鉄棒など、まわりの友だちができるようになると、**自分もできるようにになりたいと毎日取り組むようになった**。また、どうしたらできるかを友だちに聞くようになったし、**できたときにはみんなで喜んだ**と、話してくれるようになった。

友だちと協力しておみこしを製作する際、自分の意見が通らずに悔しかったことを自宅で語ってくれた。**悔しくてもみんなの意見を尊重してがまんした気持ちや、その気持ちを母に伝えたことが、とても成長したと感じた**。

年長の秋に、お店やさんごっこ看板を製作する時、誰が看板の文字を書くかで言い合いになったのですが、娘が「じゃあ、みんなで1文字ずつ書くことにしよう」と提案し、そのようになったそうです。**みんなの意見を聞いて、みんなが納得できる答えを出せたことが、我が子ながら成長したなあ、すごいなあ**と思いました。

毎日、お友だちからやりたくない遊びを強要されて嫌なんだと話していたので、少し離れてみたらと言ったことがありました。でも、子どもは「**〇くんは、いいところもあるんだよ**」「**優しいときもあるんだよ**」と言い、お友だちのいいところも見えているし、大事にしてるんだなあと思いました。

●園生活を通してあなた(保護者)ご自身の成長を感じたエピソードを教えてください。

子育てに自信がもてなくて、誰にも相談できずにいたが、園で同じように悩んでいる保護者の方や先生とともに試行錯誤しながら悩みを乗り越えてきたと思う。1人で抱えても解決には向かわないと気づかされた。

少しずつ余裕が持てるようになったら子どもにも優しい気持ちで接することができるようになった。

入園前、ママ友なんていないと考えていたのですが、毎日お迎えのときに顔を合わせ、子どもの話、家庭の話をするうちに、なくてはならない存在になっていきました。それ以来、少しずつ、ママ友もいいなと思うようになり、おつきあいも広がりました。**友だちをつくるのが苦手だった私が、少しだけ成長したな、と感じました**。

先生と日々話をする中で、子どもへの声かけの工夫等、プロの保育者からたくさんのことを学ばせてもらい、日々の子育てに生かすことができ、自分自身が成長させてもらってるなと感じている。

周りと比べて、我が子はできないことが多いと思っていましたが、園長先生の話や、クラス懇談を通じて、比べるのはその子の過去と今だけでいいと考えられるようになり、**我が子を肯定できるようになりました**。



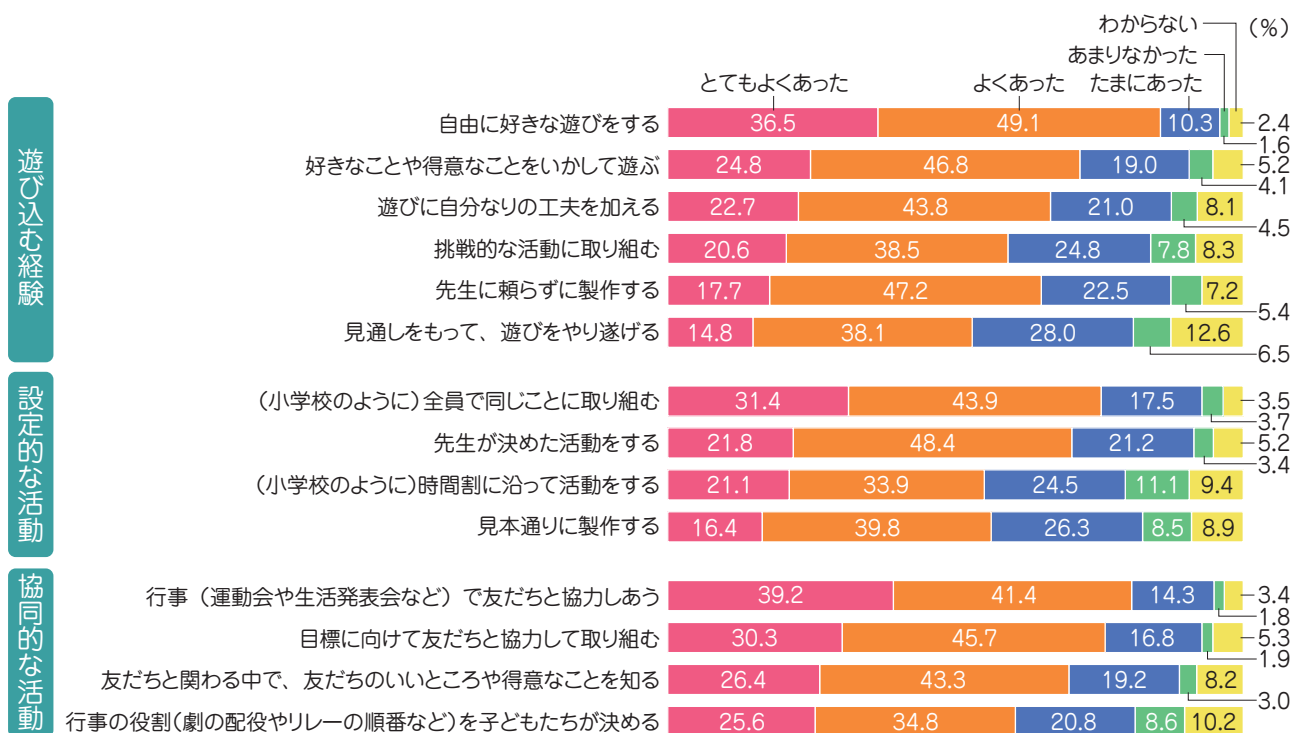
①園での子どもの経験

多くの子どもは、園で「遊び込む経験」「設定的な活動」「協同的な活動」など、さまざまに経験している

園での子どもの経験について14項目をたずねた。すべての項目で「よくあった」（「とてもよくあった」＋「よくあった」。以下同）が半数以上であり、「遊び込む経験」、「設定的な活動」、友だちとの「協同的な活動」など、さまざまな活動を多くの子どもが経験していることがうかがえた（図2-1-1）。また、園で経験したことをどのくらい家庭で話したり再現するかをたずねた。「園で楽しかったことを話す」ことが「よくあった」比率は89.7%、「園の遊びと同じことをしたがる」比率は82.3%であった。「とてもよくあった」比率は、園生活を通じた子どもの成長実感が強いほど高い（図2-1-2、右表）。園生活が楽しく充実していると、子どもは家庭で園の話をよくして、そうした子どもの姿から、保護者は園生活での子どもの成長を感じているのかもしれない。

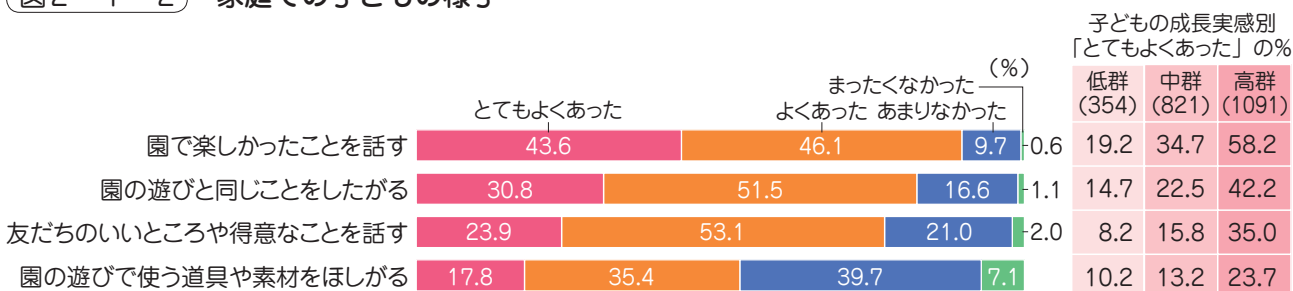
Q 園でのお子さまの経験として、以下のことはどのくらいありましたか。
※5歳児クラスの1年間についてお答えください。

図2-1-1 園での子どもの経験



Q ご家庭でお子さまに次のことはどのくらいありましたか。
※5歳児クラスの1年間についてお答えください。

図2-1-2 家庭での子どもの様子



※右表の子どもの成長実感は、図1-1-1 (P5) の回答結果を元に、低群 (成長実感7以下)・中群 (同8、9)・高群 (同10) と設定した。

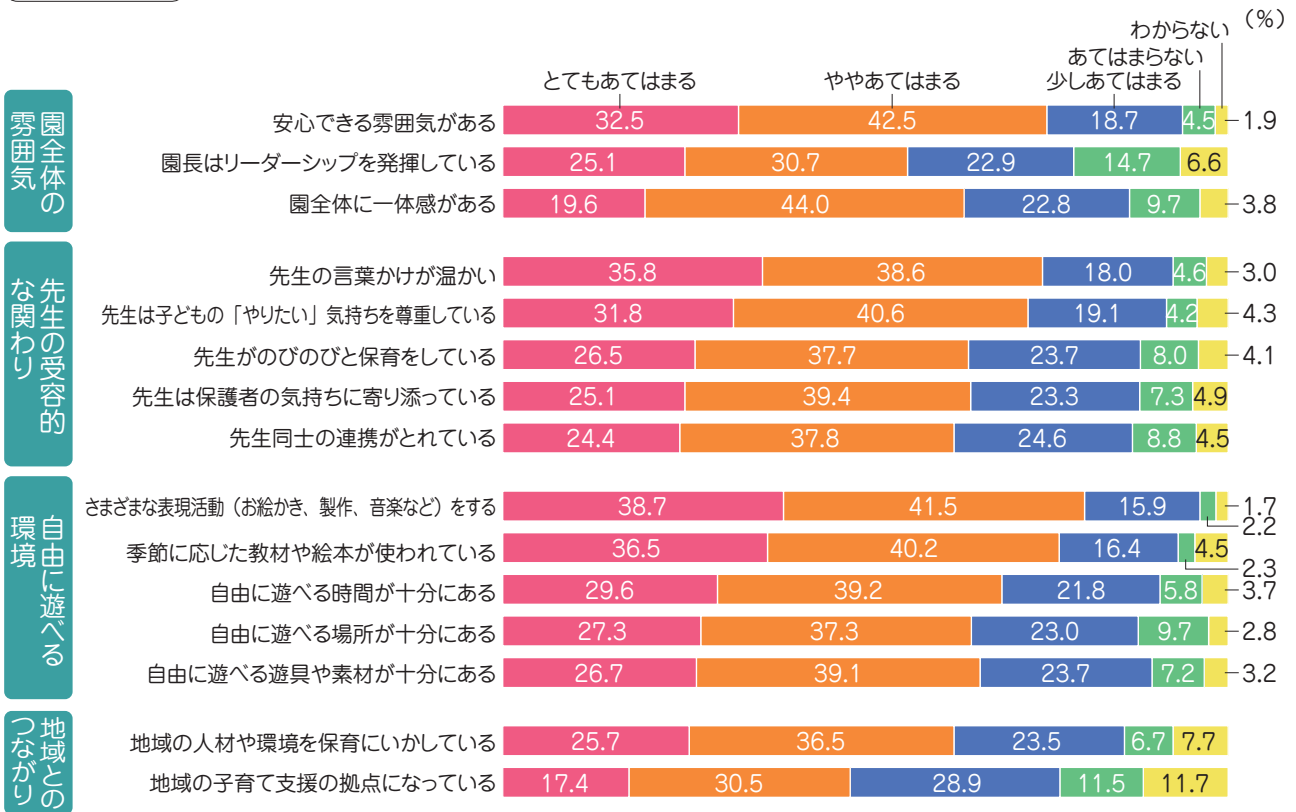
②園の環境、保育のタイプ

園の雰囲気や先生の関わり、遊びの環境などは、おおむね肯定的に捉えられている

園の環境などの印象について15項目をたずねた。「安心できる雰囲気がある」と感じる（「とてもあてはまる」＋「ややあてはまる」。以下同）比率は75.0%、「先生の言葉かけが温かい」は74.4%などであった（図2-2-1）。多くの保護者は、園の雰囲気や環境について肯定的に捉えているようだ。また園の活動について、自由活動と一斉活動の比率をたずねたところ、「自由5割、一斉5割」が32.2%と最も多かった。一斉活動よりも自由活動のほうが多い「自由型」は34.3%、自由活動よりも一斉活動のほうが多い「一斉型」は33.6%であり、3つのタイプがそれぞれ約1/3ずつとなった（図2-2-2）。

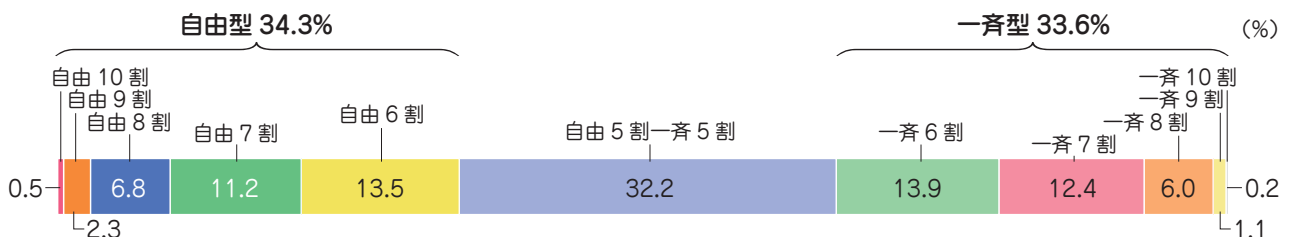
Q 園の現在の印象として、以下はどれくらいあてはまりますか。

図2-2-1 園の環境などの印象



Q お子さまが通う園の活動を、お子さまが自由に遊ぶ「自由活動」と先生が設定する「一斉活動」に分けると、その割合はどれくらいですか。※5歳児クラスの1年間についてお答えください。

図2-2-2 自由活動と一斉活動の比率



※「自由10割一斉0割」を「自由10割」、「自由0割一斉10割」を「一斉10割」のように図示。

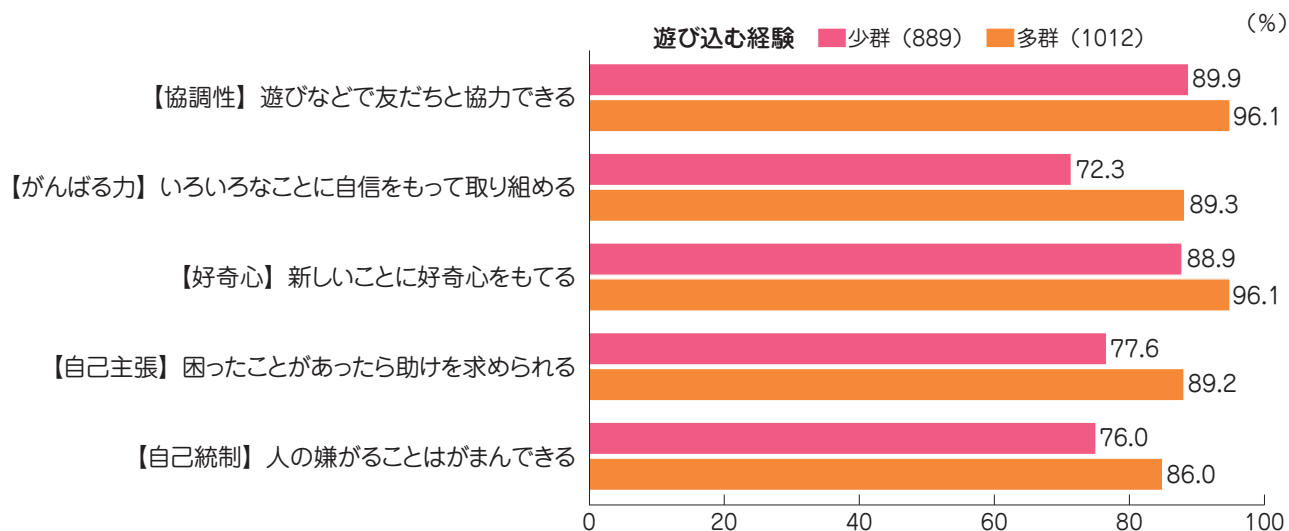
※一斉活動より自由活動の比率が高いタイプを「自由型」、自由活動より一斉活動の比率が高いタイプを「一斉型」とした。

③園での経験と子どもの「学びに向かう力」

園で「遊び込む経験」を多くするほうが、子どもの「学びに向かう力」は高い

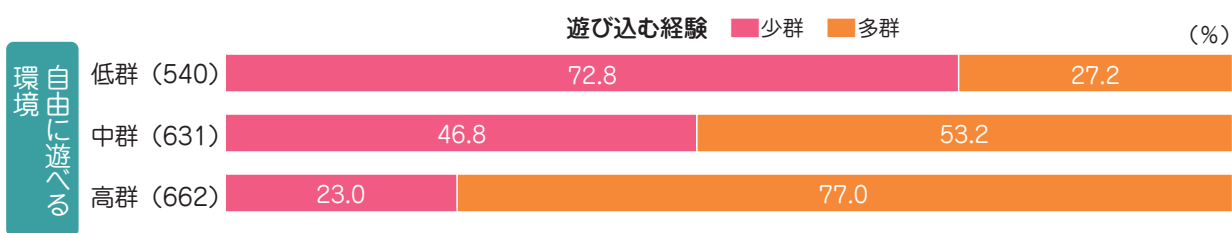
「遊び込む経験」(P9、図2-1-1)の頻度に応じて2群に分けて、子どもの「学びに向かう力」との関連を調べた。その結果、年長児1年間に、園で「遊び込む経験」を多くしているほうが、「協調性」「がんばる力」「好奇心」「自己主張」「自己統制」などの「学びに向かう力」が高い傾向がみられた(図2-3-1)。また、自由に遊べる環境が十分にあるほど(図2-3-2)、先生の受容的な関わりがあるほど(図2-3-3)、遊び込む経験が多かった。遊び込む経験は、自由度の高い遊びの環境や先生の温かい関わりにより支えられていることがうかがえる。

図2-3-1 子どもの「学びに向かう力」(遊び込む経験別)



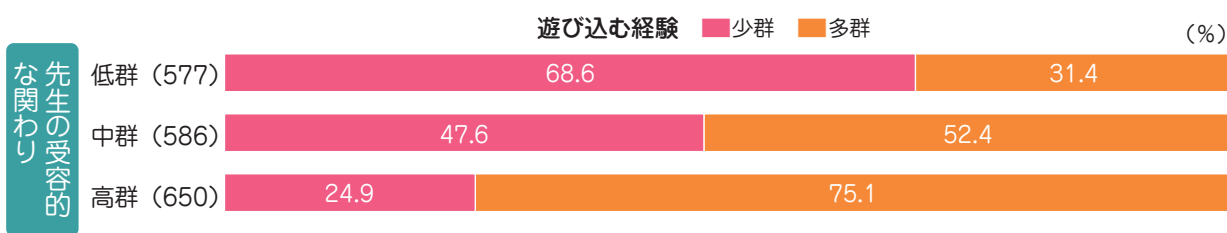
※「学びに向かう力」は、5つの領域(好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力)に関わる15の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。※「遊び込む経験」は、6項目(P9、図2-1-1)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

図2-3-2 遊び込む経験(自由に遊べる環境別)



※「自由に遊べる環境」は、5項目(P10、図2-2-1)について、「とてもあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「少しあてはまる」を2点、「あてはまらない」を1点として合計値を得点化し、3区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。※「遊び込む経験」は、6項目(P9、図2-1-1)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

図2-3-3 遊び込む経験(先生の受容的な関わり別)

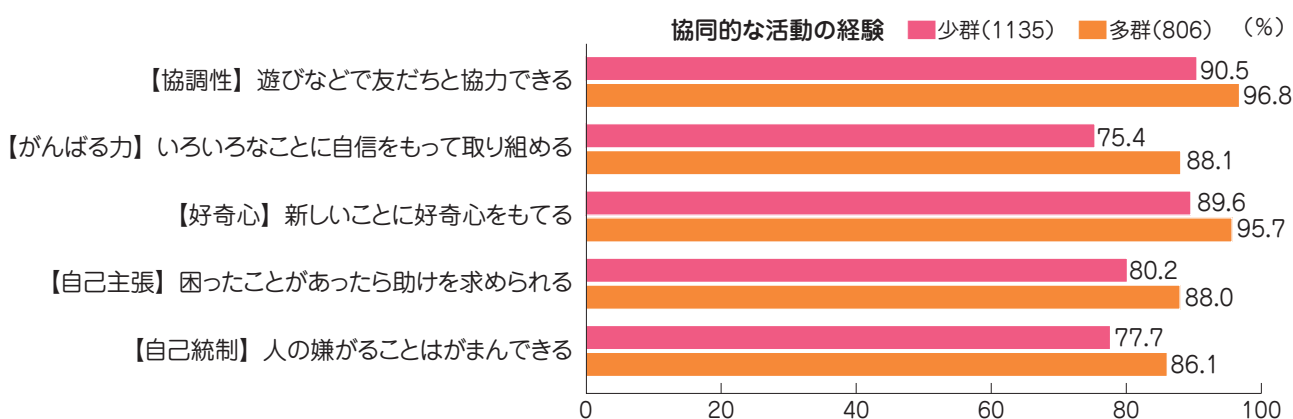


※「先生の受容的な関わり」は、5項目(P10、図2-2-1)について、「とてもあてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「少しあてはまる」を2点、「あてはまらない」を1点として合計値を得点化し、3区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。※「遊び込む経験」は、6項目(P9、図2-1-1)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

園で、友だちとの「協同的な活動」を多く経験するほうが、子どもの「学びに向かう力」は高い

「協同的な活動」(P9、図2-1-1)の頻度に応じて2群に分けて、子どもの「学びに向かう力」との関連を調べたところ、「協同的な活動」を多く経験しているほうが、「学びに向かう力」が高い傾向がみられた(図2-3-4)。また「遊び込む経験」が多いほうが、「協同的な活動」も多く、2つの経験には関連がみられた(図2-3-5)。さらに、「協同的な活動」が多いほうが、「文字・数・思考」(認知的スキル)に関わるスコアも高かった(図2-3-6)。子どもは遊び込む中で、友だちとの関わりを通して、協調性や自己主張・自己統制などの「学びに向かう力」、友だちとのやりとりを支える「言葉」、また遊びを面白くする道具としての「文字や数」を身につけている可能性が示唆される。

図2-3-4 子どもの「学びに向かう力」(協同的な活動の経験別)



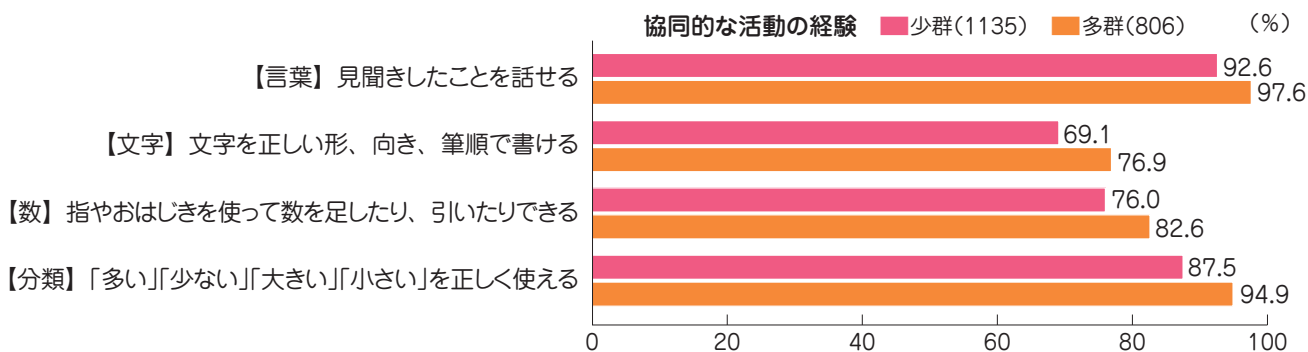
※「学びに向かう力」は、5つの領域(好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力)に関わる15の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。※「協同的な活動の経験」は、4項目(P9、図2-1-1)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

図2-3-5 遊び込む経験(協同的な活動の経験別)



※「協同的な活動の経験」は、4項目(P9、図2-1-1)について、「遊び込む経験」は、6項目(P9、図2-1-1)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

図2-3-6 子どもの「文字・数・思考」(協同的な活動の経験別)



※「文字・数・思考」は、4つの領域(言葉・文字・数・分類)に関わる19の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。※「協同的な活動の経験」は、4項目(P9、図2-1-1)について、「とてもよくあった」を4点、「よくあった」を3点、「たまにあった」を2点、「あまりなかった」を1点として合計値を得点化し、2区分した。1項目でも「わからない」を選択した人は除く。

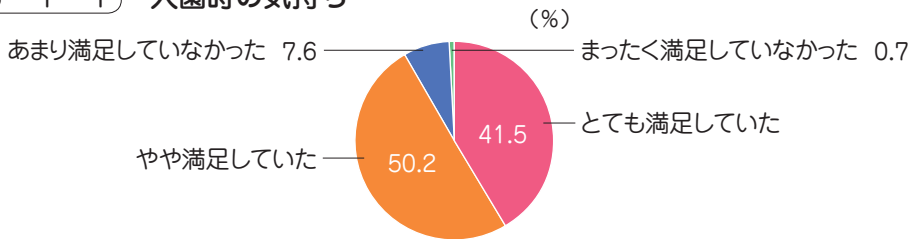
①入園時の気持ち、入園理由

入園理由として「園長や先生が信頼できる」「保育の理念に共感できる」を選んだほうが、園の満足度は約30ポイント高い

入園時に、園に対して「満足していた」「とても満足していた」+「やや満足していた」保護者は91.7%と高い(図3-1-1)。また入園理由は上位から「家から近い」「給食がある」「園長や先生が信頼できる」であった(図3-1-2)。また、(卒園前に)園の満足度が高い群のほうが、入園理由を選択する比率が総じて高く、明確な理由をもって園を選んだ結果が満足度につながっている様子が見えてくる(図3-1-2、右表)。とくに、「園長や先生が信頼できる」について、満足度が高い群が入園理由として選択した比率が42.1%であるのに対して、満足度が低い群では7.3%であり34.8ポイントの差がある。同様に「保育の理念に共感できる」では28.3ポイント、「プレ保育や見学での印象がよかった」では13.9ポイントの差がある。入園前にプレ保育や見学などを通して保育理念を理解したり、先生に信頼感をもてることで、その後の園生活の満足度につながる可能性が考えられる。

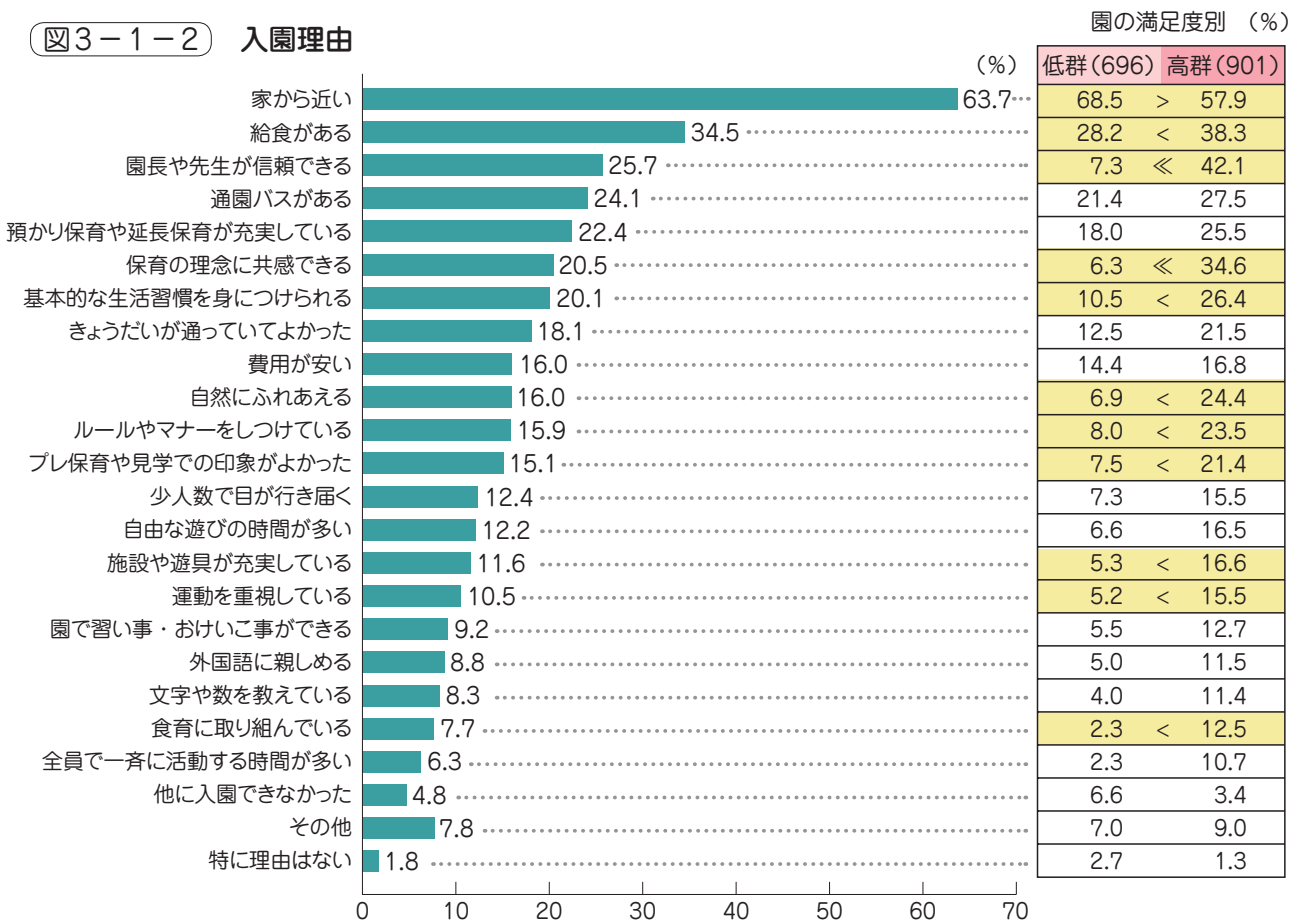
Q お子さまが入園したときの、園に対するあなたの気持ちについてあてはまるものをお選びください。

図3-1-1 入園時の気持ち



Q あなたが入園を決めた理由として、あてはまるものをすべてお選びください。

図3-1-2 入園理由



※ 複数回答。※ 右表の園の満足度は、図1-1-4 (P5) の回答結果を元に、低群(満足度7割以下)と高群(同9割以上)のみ、選択率を示している。網掛けは、低群と高群で10ポイント以上の差があった項目。10ポイント以上20ポイント未満の差があったものは「>」「<」、20ポイント以上の差があったものは「<<」としている。

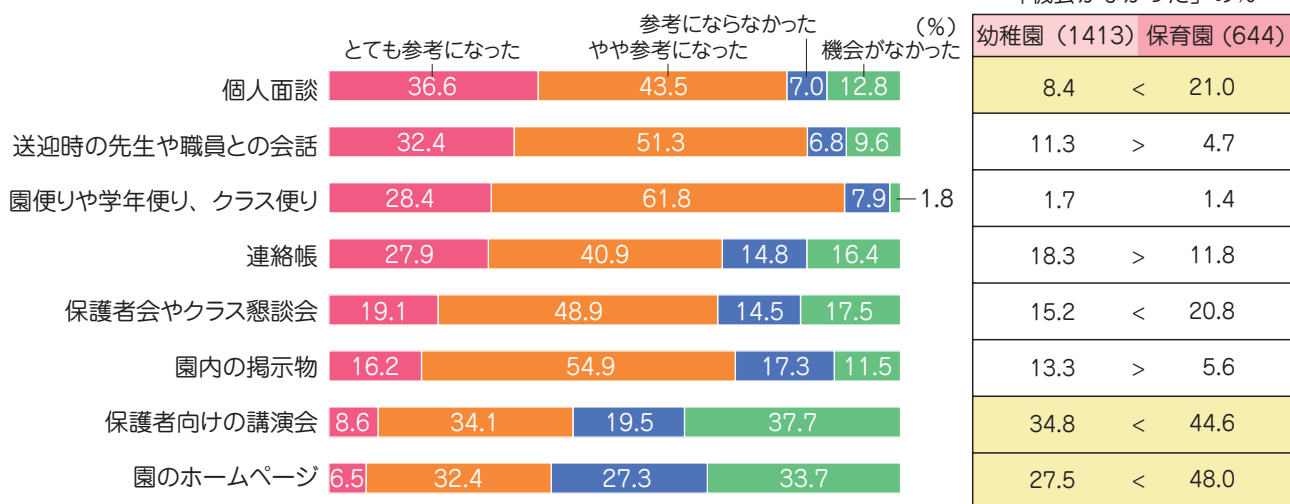
②園からの情報の参考度、園と関わる機会

「個人面談」「送迎時の先生や職員との会話」が子育ての参考になった比率が高い

園からの情報が、子育ての参考になった程度をたずねた。「とても参考になった」比率が高かったのは「個人面談」36.6%、「送迎時の先生や職員との会話」32.4%であった(図3-2-1)。いずれの項目でも、「機会がなかった」があるが、園の種別にみると、幼稚園では「送迎時の先生や職員との会話」「連絡帳」などについて、「機会がなかった」比率が保育園よりも高く、保育園では「個人面談」「園のホームページ」などの「機会がなかった」比率が高い。また園と関わる機会をたずねたところ、「先生と話をする」機会は「週に1~3日」が30.4%ともっとも高かった(図3-2-2)。園の種別にみると、保育園では「先生と話をする」機会が幼稚園より多く、幼稚園では「保護者同士の交流の会に参加する」などの機会が保育園よりも多かった。幼稚園が保育園かにより、情報提供の方法や園と保護者が関わる機会が異なることがうかがえる。

Q 次にあげる園からの情報は、子育てをするうえでどれくらい参考になりましたか。

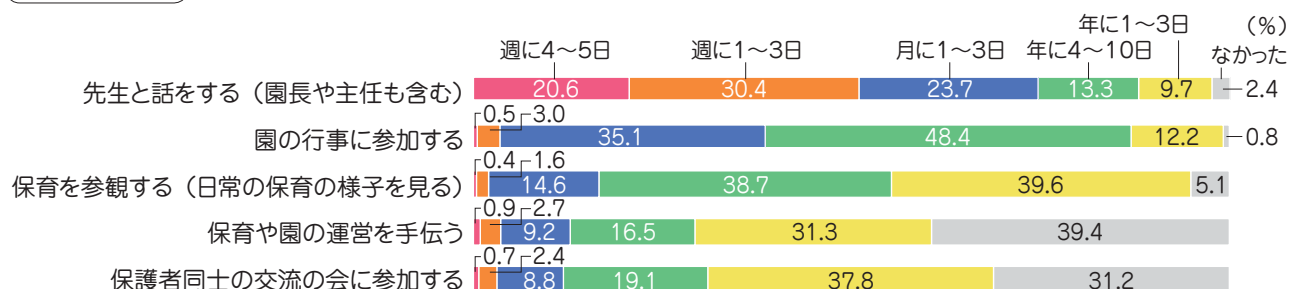
図3-2-1 園からの情報の参考度



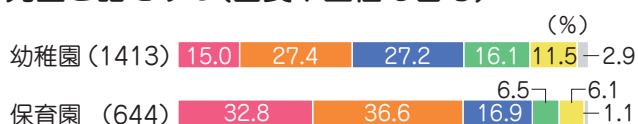
※ 右表について、園の種別は、「公立/国立幼稚園」「私立幼稚園」を「幼稚園」に、「公立保育園」「私立保育園(認可/公設民営を含む)」「認可外保育園」を「保育園」にした(以下同)。※ 幼稚園と保育園で5ポイント以上差のあった項目について「>」「<」として、10ポイント以上差のあった項目について、網掛けをしている。

Q あなたが園に関わる以下のような機会はこの1年間でどれくらいありましたか。

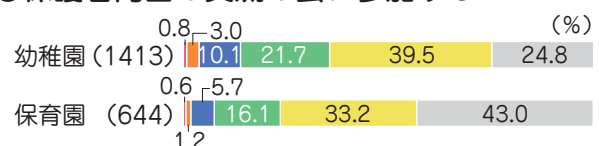
図3-2-2 園と関わる機会



●先生と話をする(園長や主任も含む)



●保護者同士の交流の会に参加する



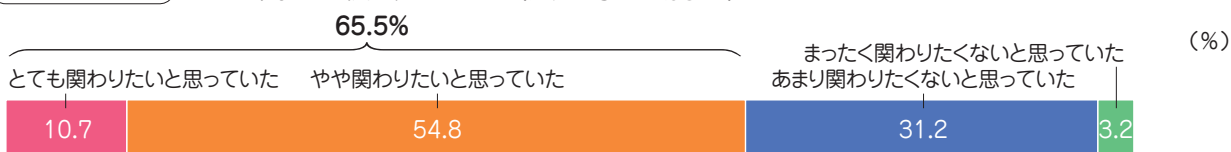
③園と関わる機会を保護者はどのように感じているか

卒園前の保護者の70.6%は、園と「関わってよかった」と感じている

園と関わる機会についてたずねた。入園時に「関わりたいと思っていた」（「とても関わりたいと思っていた」＋「やや関わりたいと思っていた」）比率は65.5%であった（図3-3-1）。卒園前、園と「関わってよかった」と感じる比率（「負担を感じたが、関わってよかった」＋「負担を感じることはなく、関わってよかった」）。以下同）は70.6%であった（図3-3-2）。入園時に「あまり関わりたくないと思っていた」保護者の51.8%は「関わってよかった」に気持ちに変容している。また園生活を通して、「子どものことを相談できる先生（園長や主任も含む）」は「2～3人いた」が56.5%、「子どものことを相談できる友だち」も「2～3人いた」が47.5%と多い。「1人もいなかった」も、それぞれ1割程度いる（図3-3-3）。

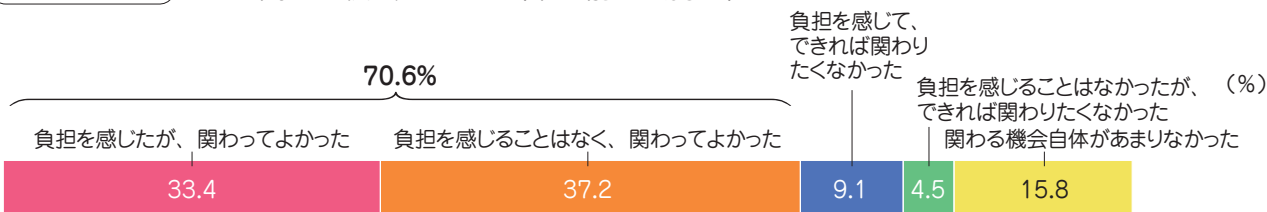
Q 入園当初、園への関わりについて、あなたはどのように感じていましたか。
※「関わり」とはP14、図3-2-2で示す内容であるとお考えください。

図3-3-1 園と関わる機会について(入園時の気持ち)

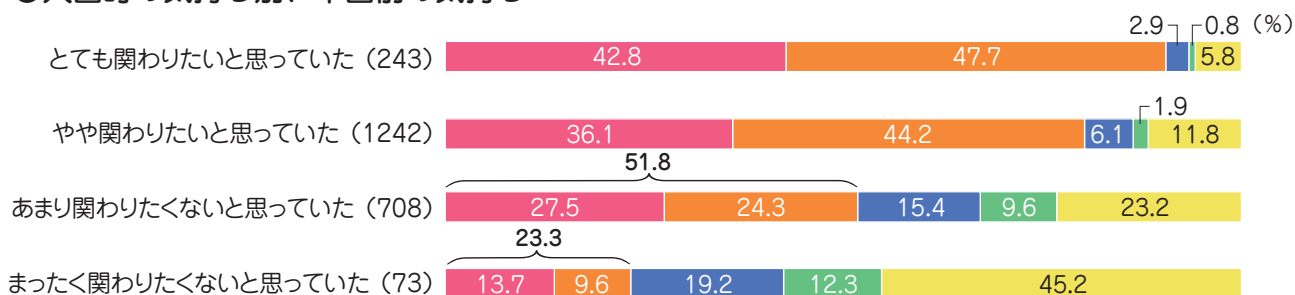


Q 卒園前の現在、あなたご自身の園への関わりを振り返ってどのように感じていますか。

図3-3-2 園と関わる機会について(卒園前の気持ち)



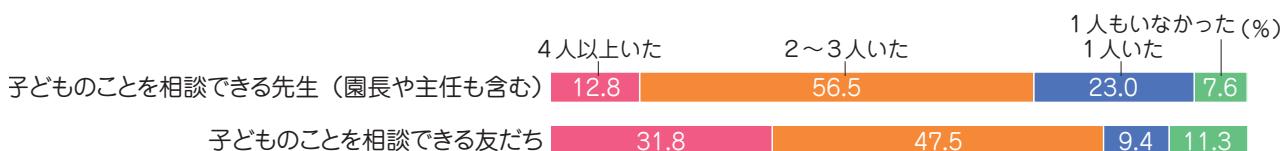
●入園時の気持ち別、卒園前の気持ち



※「入園時の気持ち」は図3-3-1、「卒園前の気持ち」は図3-3-2の結果を用いている。

Q 園生活を通して、次にあげる人は何人いましたか。

図3-3-3 園生活を通じた人的ネットワーク

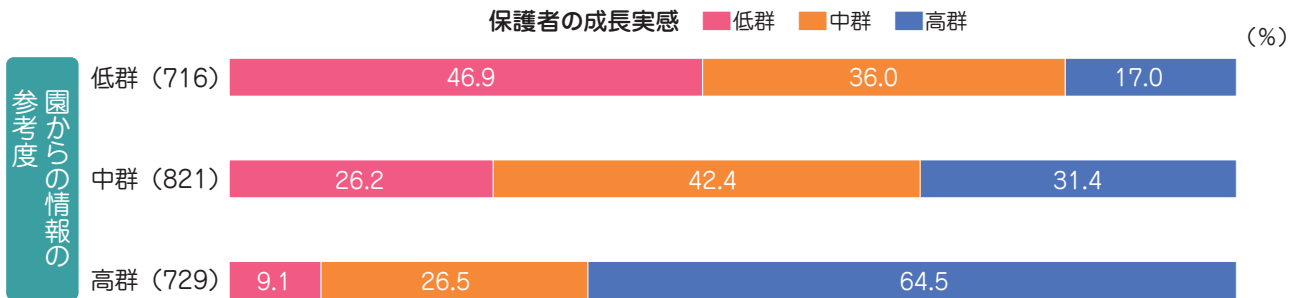


④保護者自身の成長と園と関わる機会

園生活を通じた保護者の成長実感には、「園からの情報の参考度」「園と関わる機会」「(保護者の)友だちの人数」が関連

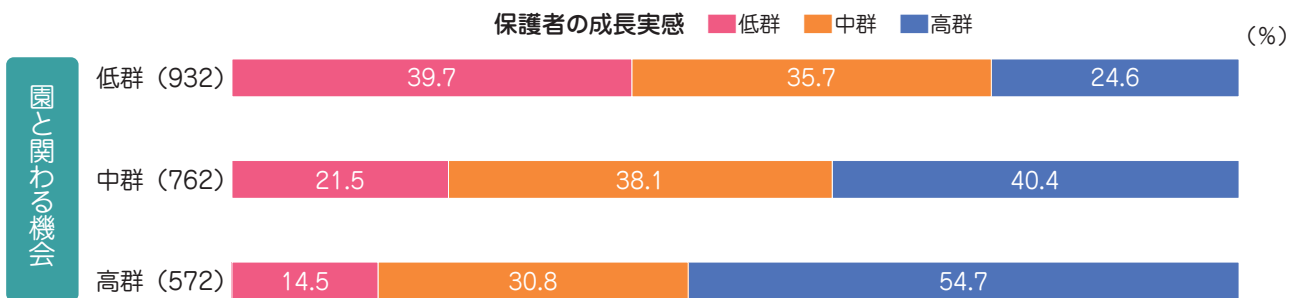
P7で示した保護者自身の成長実感(図1-2-2)と関連する要素を調べた。園からの情報が子育ての参考になったほど、また園と関わる機会が多いほど、さらに園生活を通じた(保護者の)友だちが多いほど、保護者としての成長を感じる比率が高いことがわかった(図3-4-1~3)。

図3-4-1 保護者の成長実感(園からの情報の参考度別)



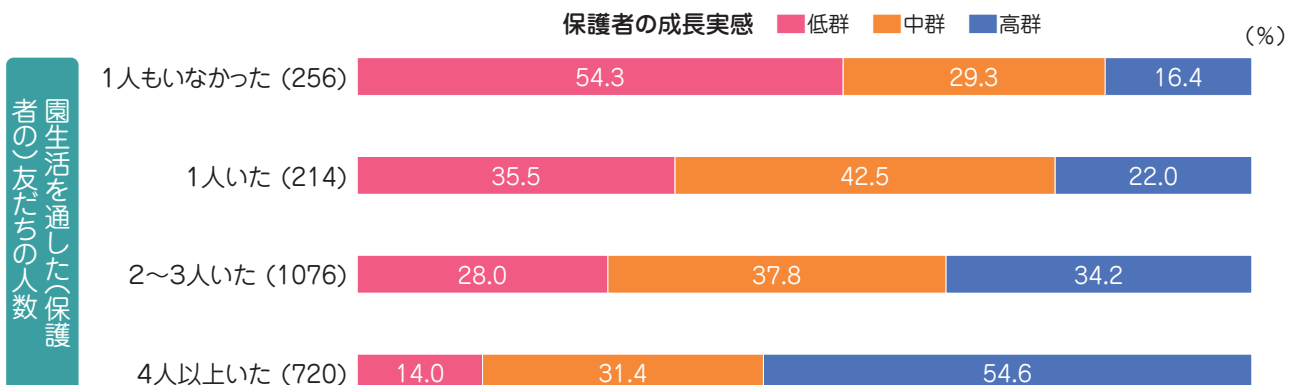
※「保護者の成長実感」は、図1-2-2 (P7) の「保護者の成長実感」の4項目について、「強く感じる」を4点、「やや強く感じる」を3点、「少し感じる」を2点、「感じない」を1点として合計を得点化し、3区分した。※「園からの情報の参考度」は、図3-2-1 (P14) について「とても参考になった」を3点、「やや参考になった」を2点、「参考にならなかった」、「機会がなかった」を1点として合計を得点化し、3区分した。

図3-4-2 保護者の成長実感(園と関わる機会別)



※「保護者の成長実感」は、図1-2-2 (P7) の「保護者の成長実感」の4項目について、「強く感じる」を4点、「やや強く感じる」を3点、「少し感じる」を2点、「感じない」を1点として合計を得点化し、3区分した。※「園と関わる機会」は、図3-2-2 (P14) について、「週に4~5日」を6点、「週に1~3日」を5点、「月に1~3日」を4点、「年に4~10日」を3点、「年に1~3日」を2点、「なかった」を1点として合計値を得点化し、3区分した。

図3-4-3 保護者の成長実感(園生活を通じた保護者の友だち人数別)

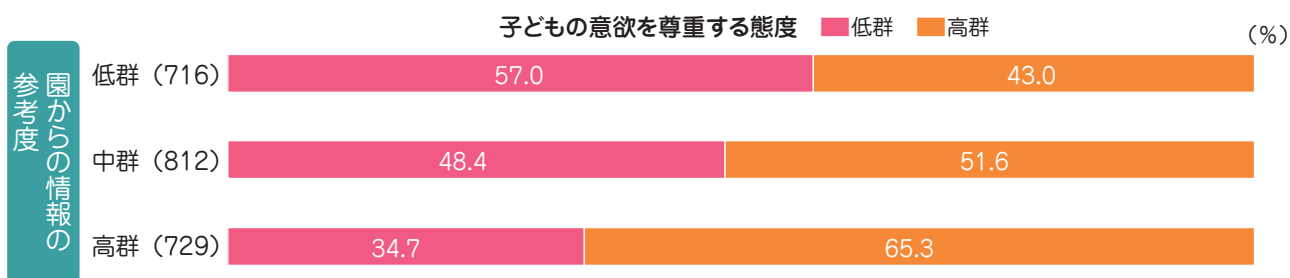


※「保護者の成長実感」は、図1-2-2 (P7) の「保護者の成長実感」の4項目について、「強く感じる」を4点、「やや強く感じる」を3点、「少し感じる」を2点、「感じない」を1点として合計を得点化し、3区分した。※「園生活を通じた友だちの人数」は、図3-3-3 (P15) の回答結果(「子どものことを相談できる友だち」)を用いている。

園からの情報を子育ての参考に使っている保護者は、子どもの意欲を尊重する比率が高い

園から提供されるさまざまな情報（先生との会話や園便りなど）が子育ての参考になったと感じる保護者は、子どもの意欲を尊重する比率が高い（図3-4-4）。また園と関わる機会（行事や保育参観など）が多かった保護者も、子どもの意欲を尊重する比率が高く（図3-4-5）、そうした養育態度をとるほうが、子どもの「学びに向かう力」が高い傾向がみられた（図3-4-6）。

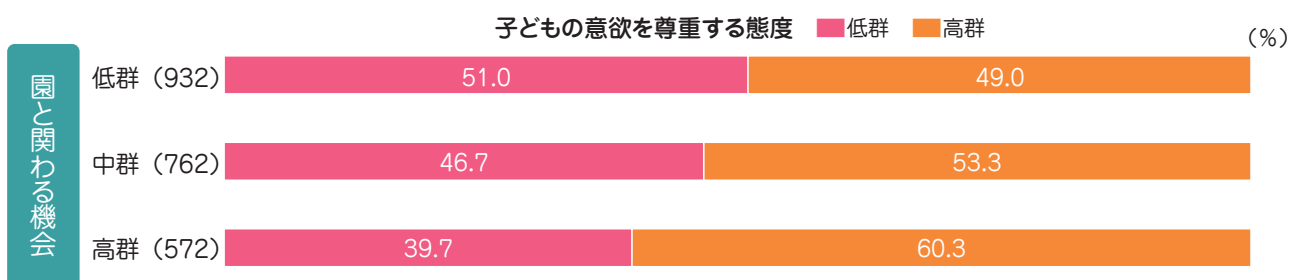
図3-4-4 子どもの意欲を尊重する態度(園からの情報の参考度別)



※「子どもの意欲を尊重する態度」は、7項目（「子どもがやりたいことを尊重して支援する」「どんなことでも子どもの気持ちを受け止める」「何事にも子どもの意見や要望を優先させる」「子どもが自分でやろうとすると、手を出さない」「指図せずに、子どもに自由にさせる」「しかるよりもほめるようにしている」「しかるときに子どもの言い分を聞く」）から構成している。「よくある」を4点、「ときどきある」を3点、「あまりない」を2点、「ぜんぜんない」を1点として合計値を得点化し、2区分した（以下、図3-4-5～6も同様）。

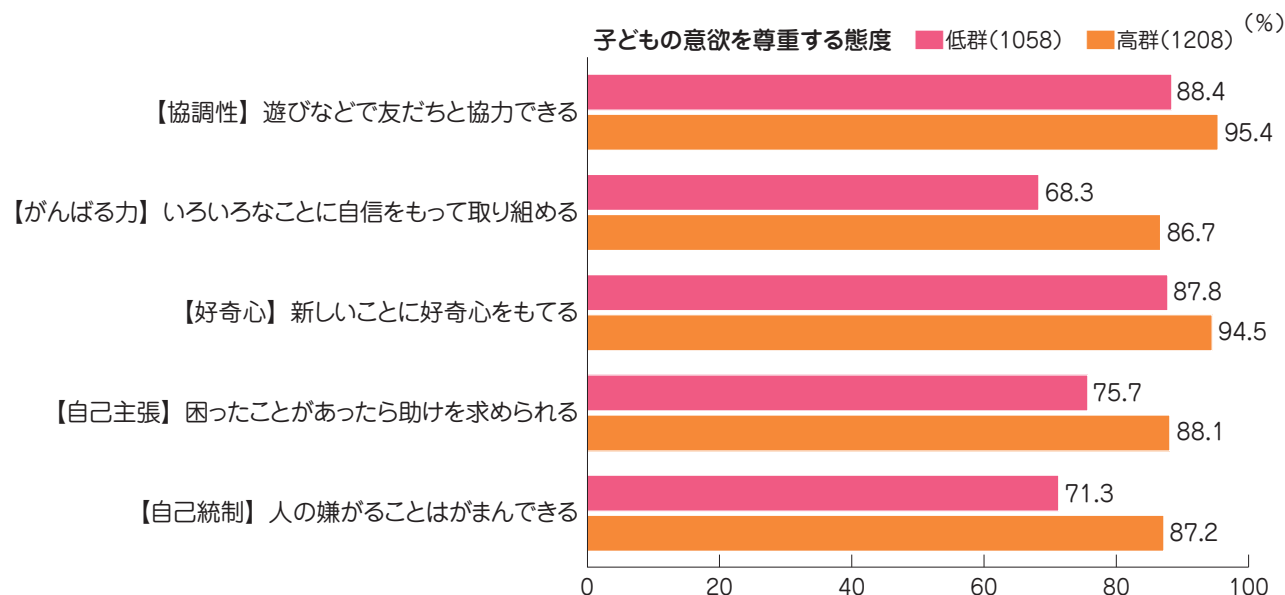
※「園からの情報の参考度」は、図3-2-1（P14）について「とても参考になった」を3点、「やや参考になった」を2点、「参考にならなかった」「機会がなかった」を1点として合計を得点化し、3区分した。

図3-4-5 子どもの意欲を尊重する態度(園と関わる機会別)



※「園と関わる機会」は、図3-2-2（P14）について、「週に4～5日」を6点、「週に1～3日」を5点、「月に1～3日」を4点、「年に4～10日」を3点、「年に1～3日」を2点、「なかった」を1点として合計値を得点化し、3区分した。

図3-4-6 子どもの「学びに向かう力」(子どもの意欲を尊重する態度別)



※「学びに向かう力」は、5つの領域（好奇心・協調性・自己統制・自己主張・がんばる力）に関わる15の質問項目から構成される。各領域を代表する質問項目を1つずつ図示。※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

調査の意義とポイント

無藤 隆 (白梅学園大学)

本調査は、近年特に取り上げられることの多い「学びに向かう力」ないし「非認知的能力」の成長に対して、園の保育のあり方と園と保護者の関わり、さらに保護者自身の養育の仕方がどう影響を与えうかの検討をしています。保護者への一回の質問紙調査なので、保護者から見た園のあり方であり、保護者から見た子どもの成長の様子であることや、園生活は卒園時に振り返って答えてもらったことなどの調査手法上の限界があります。また結果としての関係は統計分析的に意味がありますが、さほど大きなものではないので、個人差や園の違いはここで見た要因以外に多くが関わっていると思われます。その上で、4点ほど重要な知見が見出されています。1つは園の子どもの遊びのための環境が充実し、保育者の関わりが受容的である方が子どもがたっぷり遊び込んでいるということです。第二は同じくそういう園であると、保護者に様々な情報を伝え、おそらく保護者が園を信頼するであろうということです。第三は、保護者の園生活を通して保護者の成長実感が保護者の養育態度に影響し、さらに学びに向かう力を育てる可能性です。第四は、園での遊び込む経験が学びの向かう力を伸ばすであろうということです。子どもがいろいろなことに好奇心を持ち、自信を持って取り組み、必要なら友だちと協力し、助けを求め、さらに我慢できるようになっていくのです。まさに、幼児教育の可能性を示したデータであると思います。



保護者はどのように本調査結果を活用できるか？

秋田 喜代美 (東京大学)

今回の調査結果から3点のことがわかります。まず、第一に、園生活を通して、子どもだけではなく親もまた親としての成長を実感できていること、それは園からの情報や園との関わりを通して「子どもの得意なことやよさ」への気づきから生まれていることが明らかになった点です。家庭では、親の期待どおりにわが子に行動してほしいという要求のほうが大きく、子どものよさを認めるよりも、とかくできていない部分をみってしまう傾向があります。しかし、子どもの得意なことやよさに気づくことこそが喜びや満足につながる大事なポイントです。保育者や子どもから聴く園の情報から子どものよさの情報を得て、そこを伸ばしていく関わりをしていくのがよいことが示唆されます。第二に、園からの情報を家庭での子育てにも取り入れる学び上手な保護者の態度が、子どもの意欲を尊重する態度や、子どもの「学びに向かう力」を育てることにつながることで、保育者の話や園便り、行事や保育参観を、子どものことを親が学ぶチャンスとすることで園へ関わることも楽しくなり、また家庭と園との連続性が親の関与でつながることが、子どもにとっても「よいこと循環」を生み出しています。行事や参観を保護者に課せられる義務として感じるよりも、両者の協力を通して子どものことを学び合い、育ち合う子育てコミュニティを楽しみながら形成していけるとよいと思います。そして第三に、5歳になると就学が気になる保護者も多いでしょう。一番大切なことは「遊び込む経験」が「学びに向かう力」につながるということが明らかになりました。5歳こそ、夢中、没頭して遊び込む経験を十分に保障して、生涯にわたる学びの基礎を培ってほしいと思います。



子どもが「遊び込む」ために園ができる工夫とは？

安達 謙（せりひじり幼稚園・ひじりにじいる保育園 園長）

当園では学年ごとの週案を作成する際に写真を用いて、子どものつぶやき等を書き込み、「何に面白さを感じているか？」を書き出し、その姿を理解することから、子どもたちが遊びを深めたり、遊びが展開（発展）するような環境構成や保育者の関わり方を考えています。例えば、年少児がままごとコーナーのお医者さんセットで遊ぶ姿があったときに、友達同士で診察し合う姿が観られたとします。すると、コーナーを広くとったり、椅子を向かい合うように並べておいたり、イメージがふくらむように身体のイラストを掲示したり、薬の容器などの“なりきれる”アイテムを置いたり、やりとりが盛り上がるように保育者がお医者さんが使いそうな言葉を使って一緒に遊ぶなどが考えられます。環境構成や保育者の関わり方の工夫があることで、遊びはより面白くなり、子どもたちは遊びに入り込んでいく経験ができるように思います。そうした“遊び込む”経験が、意欲や主体性などの「学びに向かう力」につながっていくと考えます。

園は、本調査結果をどのように活用できるか？

関 美津子（練馬区立北大泉幼稚園 園長）

園で子どもが「遊び込む経験」や「自由に遊べる環境が十分にあった」という回答と園に対する満足度などから、幼児期の遊びの重要性に対する保護者の理解が高いことを感じました。本調査結果は、幼児教育の本質を見極め、教育の質を高めていくための方向性を示すことにつながると考えます。園においては、教育理念や実態に応じた適切な情報発信が重要です。園からの一方的な情報発信になっていないか、保護者が必要としている情報なのかなど、「園からの情報の参考度」は改善に向けての視点となるでしょう。また、「保護者の成長実感」の視点も有効であり、保育者が積極的に保護者理解に努めることは、子どもへの関わり方や保育のあり方を見直す機会となり、保育者自身の力量アップにつながります。保護者が園と関わりたくなる状況を工夫したり、保護者同士の関係づくりをコーディネートしたりすることも園の大きな役割であり、「親も子どもも保育者も育つ園づくり」が一層求められているといえます。

子どもと保護者がともに育つ、保護者との協同関係の工夫とは？

妹尾 正教（仁慈保幼稚園 理事長）

15年前に、保育方針を「子ども主体の協同的学び」へ転換したとき、一部の保護者と対立したことがありました。その際、どのように保護者と保育を協同して創っていくかを考え、実践したことがあります。一つ目は、「親児の会」を作り、保護者会への父親の参加を推し進めたことです。父親が関わるようになってから、園庭をともに作り、園の保育方針に共感した保護者が自主的に勉強会を行うなど、多くの企画が生まれました。二つ目は「ドキュメンテーション」の活用です。子どもの発達のプロセスを記録して可視化し、保護者と保育者との対話を生み出そうとしました。そして三つ目に、何より劇的に保護者の心を動かしたのは、保育方針を変えたことで、子どもが生き生きしはじめたことです。子どもの「こうしたい」という思いや願いを起点に、それを実現するために保護者に協力を要請することで、保護者自らがそれぞれのペースで、強みや経験をいかしてくれるようになり、保育の環境が豊かになりました。

子どもが多様であるように、保護者も多様です。保護者との協同は、強制するのではなく、保育の面白さを共有しながら、ともに楽しんでいく雰囲気や風通しのよい関係性が大切だと感じます。その結果、子どもも保護者も育つ園に近づいていくのではないかと考えます。



調査企画・分析メンバー

- 無藤 隆 (白梅学園大学教授)
秋田 喜代美 (東京大学大学院教授)
白川 佳子 (共立女子大学教授)
鈴木 正敏 (兵庫教育大学大学院准教授)
野口 隆子 (十文字学園女子大学准教授)
荒牧 美佐子 (目白大学専任講師)
- 安家 周一 (あけぼの学園理事長、あけぼの幼稚園 園長)
安達 謙 (認定こども園せんりひじり幼稚園・ひじりにじいろ保育園 園長)
関 美津子 (練馬区立北大泉幼稚園 園長)
妹尾 正教 (仁慈保幼稚園 理事長)
中山 昌樹 (認定こども園あかみ幼稚園 理事長・園長)
- 磯部 頼子 (ベネッセ教育総合研究所 顧問)
佐久間 貴子 (株式会社ベネッセスタイルケア こども・子育て支援カンパニー長)
木村 治生 (ベネッセ教育総合研究所 副所長)
小泉 和義 (ベネッセ教育総合研究所 副所長)
高岡 純子 (ベネッセ教育総合研究所 次世代育成研究室長)
真田 美恵子 (ベネッセ教育総合研究所 主任研究員)

※肩書き・所属は、刊行時点のものです。

本調査結果の引用・転載は、下記にてご確認ください。

<http://berd.benesse.jp/application/>

本レポートは、
ベネッセ教育総合研究所のホームページからダウンロードできます

ベネッセ教育総合研究所が実施している各種調査の結果も、ご覧いただけます

ベネッセ教育総合研究所

検索

<http://berd.benesse.jp/>

「園での経験と幼児の成長に関する調査」

発行日: 2016年8月30日

発行人: 谷山 和成

編集人: 小泉 和義

発行所: ㈱ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所

企画・制作: ベネッセ教育総合研究所

〒206-0033 東京都多摩市落合1-34

デザイン: ㈱ジー・アンド・ピー

6TT003

© Benesse Educational Research and Development Institute

※無断転載を禁じます。